

図 21 下位領域「家事」における月齢にともなう性別ごとの平均値の推移

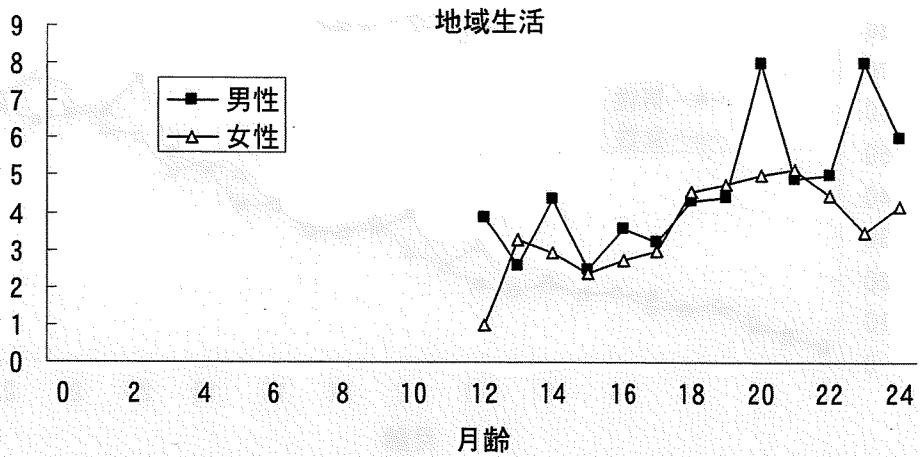


図 22 下位領域「地域生活」における月齢にともなう性別ごとの平均値の推移

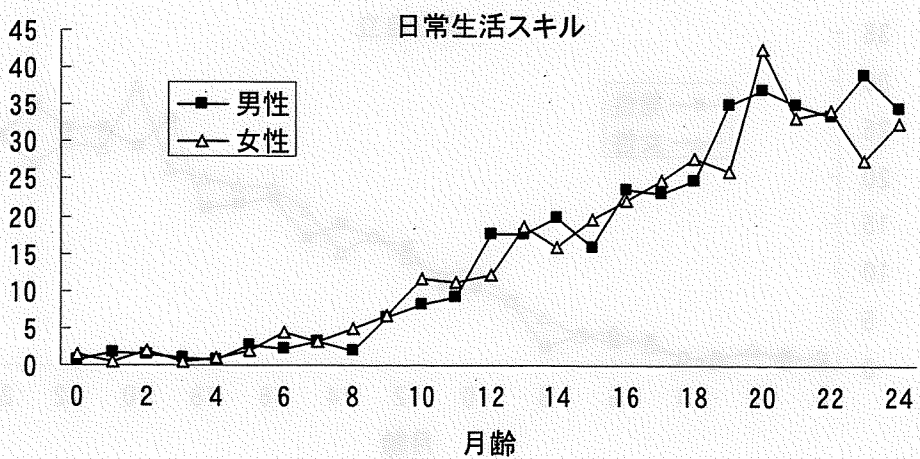


図 23 領域「日常生活スキル」における月齢にともなう性別ごとの平均値の推移

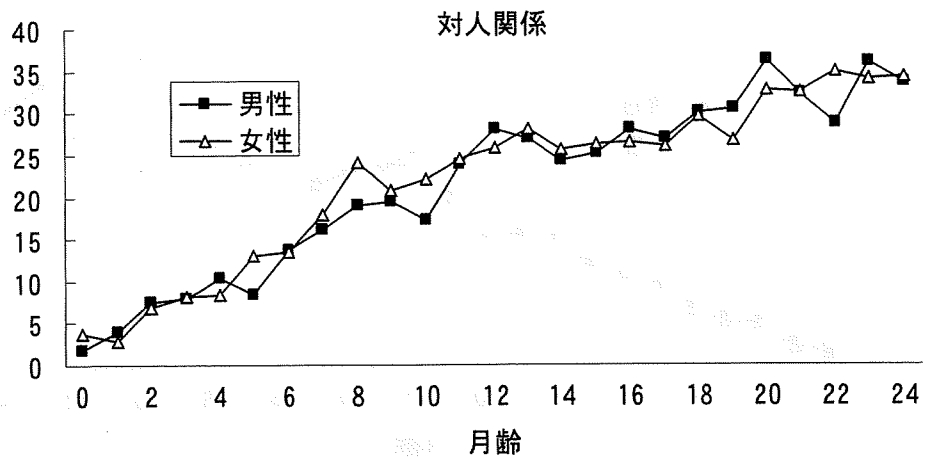


図 24 下位領域「対人関係」における月齢にともなう性別ごとの平均値の推移

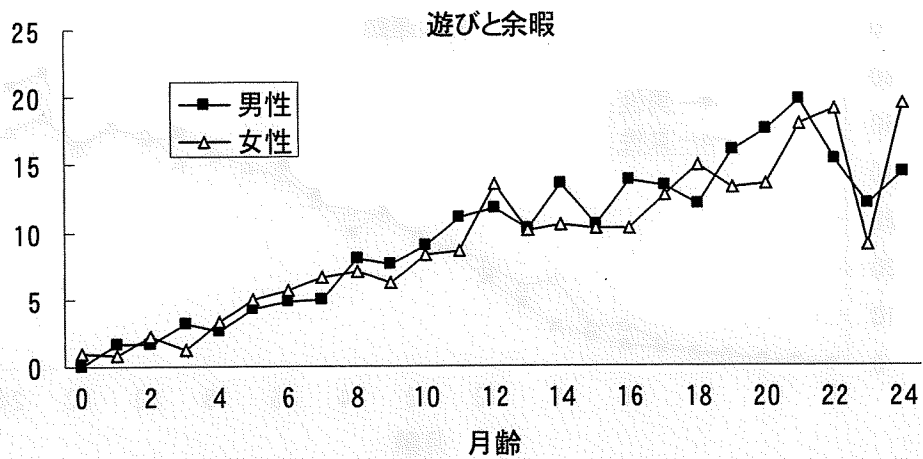


図 25 下位領域「遊びと余暇」における月齢にともなう性別ごとの平均値の推移

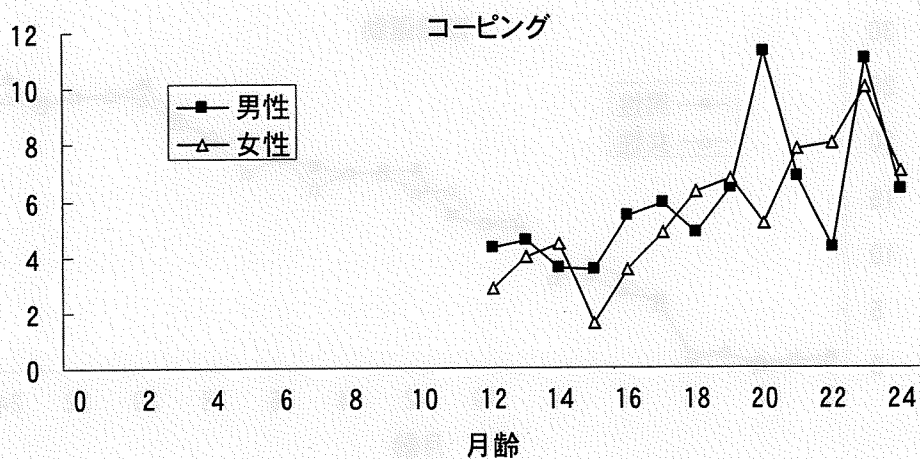


図 26 下位領域「コーピング」における月齢にともなう性別ごとの平均値の推移

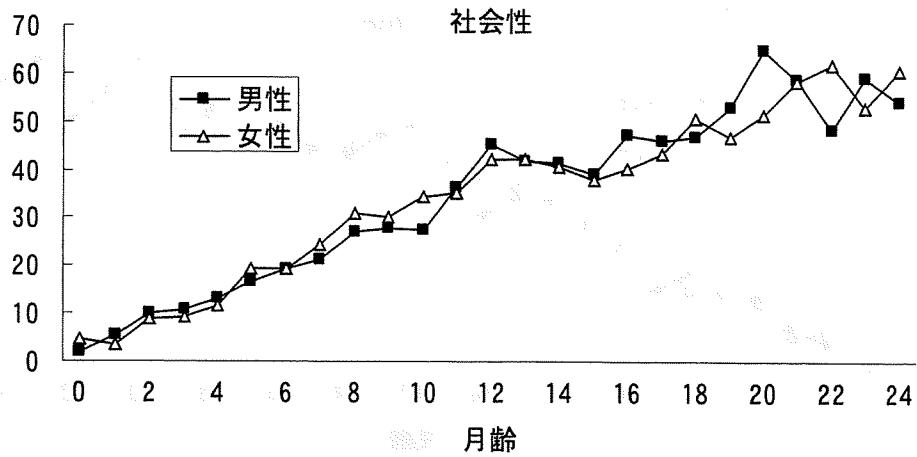


図 27 領域「社会性」における月齢にともなう性別ごとの平均値の推移

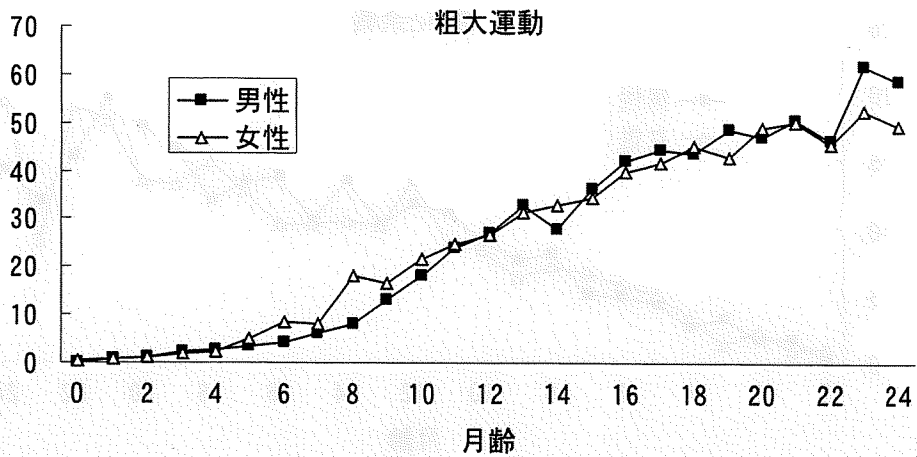


図 28 下位領域「粗大運動」における月齢にともなう性別ごとの平均値の推移

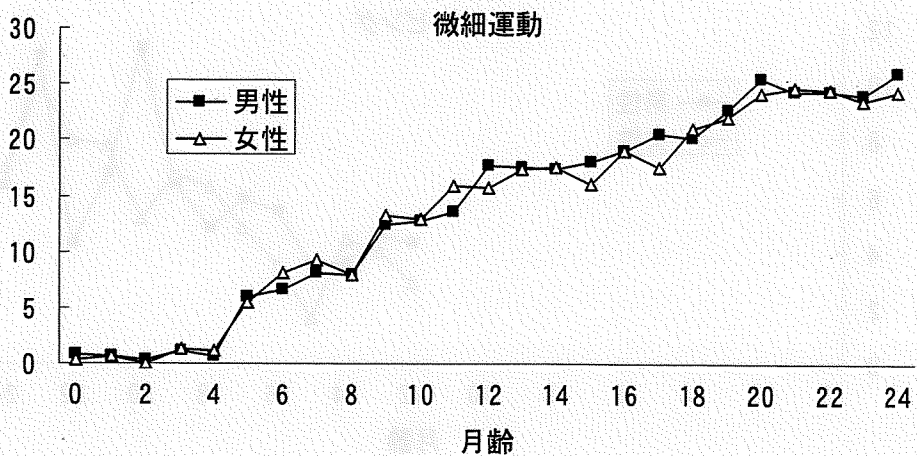


図 29 下位領域「微細運動」における月齢にともなう性別ごとの平均値の推移

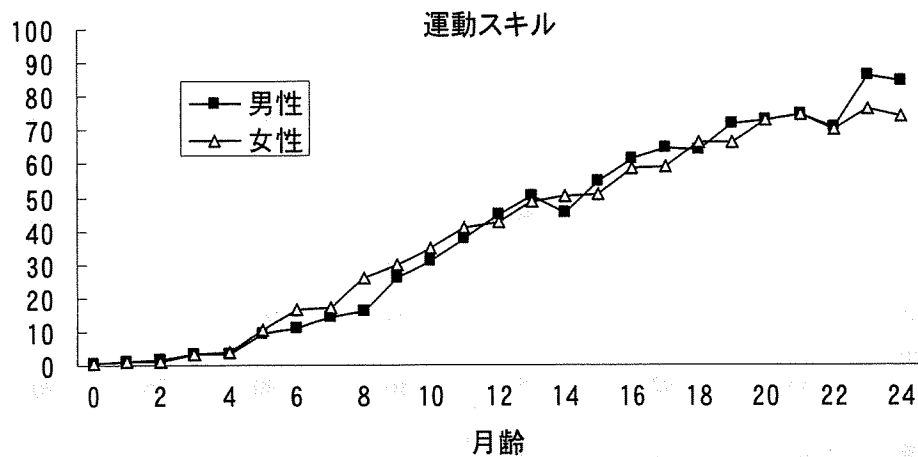


図 30 領域「運動スキル」における月齢にともなう性別ごとの平均値の推移

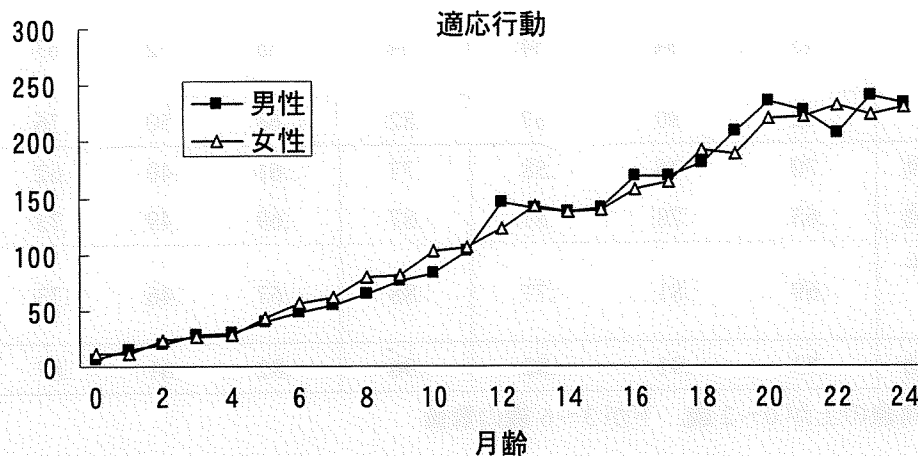


図 31 「適応行動」(総得点)における月齢にともなう性別ごとの平均値の推移

6. 領域・下位領域間の相関  
 相関が高いが、これは全ての下位領域が年齢の影響を強く受けていることを反映しているものと考えられる。

表 40 0～2 歳および 3～6 歳における領域・下位領域間の相関

	受容言語	表出言語	読み書き	コミュニケーション	身辺自立	家事	地域生活	日常生活スキル
受容言語	-	.88	-	.95	.91	.70	.69	.92
表出言語	.73	-	-	.99	.88	.60	.75	.89
読み書き	.48	.68	-	-	-	-	-	-

(表 40 のつづき)

コミュニ ケーショ ン	.78	.94	.87	-	.91	.68	.76	.93
身辺自立	.64	.75	.64	.78	-	.70	.70	.98
家事	.42	.61	.46	.58	.54	-	.62	.83
地域生活	.55	.73	.77	.81	.67	.61	-	.82
日常生活 スキル	.65	.82	.75	.86	.90	.75	.90	-
対人関係	.50	.65	.52	.65	.53	.31	.58	.59
遊びと余 暇	.64	.75	.70	.81	.68	.51	.76	.79
コーピン グ	.45	.64	.54	.64	.55	.52	.63	.66
社会性	.62	.80	.67	.82	.68	.50	.76	.78
粗大運動	.70	.76	.58	.77	.61	.40	.62	.66
微細運動	.63	.78	.81	.87	.69	.49	.73	.77
運動スキ ル	.69	.81	.77	.88	.67	.46	.73	.76
適応行動	.73	.91	.82	.96	.82	.61	.87	.93

注：対角線の上が 0～2 歳，下が 3～6 歳の数値

(表 40 のつづき)

	対人関 係	遊びと余 暇	コーピ ング	社会 性	粗大運 動	微細運 動	運動スキ ル	適応行 動
受容言語	.85	.83	.66	.89	.87	.87	.88	.94
表出言語	.83	.82	.77	.88	.82	.85	.84	.93
読み書き	-	-	-	-	-	-	-	-
コミュニ ケーショ ン	.86	.84	.76	.91	.86	.87	.88	.96
身辺自立	.87	.86	.67	.91	.92	.91	.93	.96
家事	.61	.51	.56	.62	.57	.68	.64	.75
地域生活	.74	.63	.69	.76	.58	.74	.67	.80

(表 40 のつづき)

日常生活 スキル	.86	.86	.72	.91	.90	.90	.91	.96
対人関係 遊びと余 暇	-	.86	.77	.97	.90	.92	.92	.94
コーピン グ	.59	-	.62	.94	.82	.85	.85	.90
社会性	.50	.61	-	.85	.61	.70	.68	.80
粗大運動	.86	.83	.83	-	.91	.93	.93	.97
微細運動	.48	.71	.48	.64	-	.93	.99	.95
運動スキ ル	.66	.76	.55	.77	.75	-	.97	.95
適応行動	.63	.78	.55	.77	.90	.97	-	.97
	.75	.87	.74	.92	.75	.89	.90	-

注：対角線の上が0～2歳，下が3～6歳の数値

表 41 7～12歳および13～18歳における領域・下位領域間の相関

	受容言 語	表出言 語	読み書 き	コミュ ニケー ション	身辺自 立	家事	地域生 活	日常生 活スキ ル
受容言語	-	.32	.38	.55	.28	.30	.32	.34
表出言語	.42	-	.61	.86	.59	.49	.62	.62
読み書き	.79	.45	-	.91	.61	.65	.66	.72
コミュニ ケーショ ン	.77	.78	.91	-	.66	.65	.71	.76
身辺自立	.46	.12	.61	.48	-	.66	.57	.76
家事	.31	.08	.31	.26	.30	-	.71	.92
地域生活	.07	.05	.22	.17	.36	.49	-	.91
日常生活 スキル	.31	.08	.41	.32	.57	.85	.84	-
対人関係 遊びと余 暇	.49	.36	.55	.56	.42	.30	.34	.44
	.01	-.05	.11	.05	.11	.31	.45	.43

(表 41 のつづき)

コーピング	.02	.06	.08	.08	.34	.39	.54	.58
社会性	.21	.17	.33	.31	.39	.41	.55	.60
粗大運動	-	-	-	-	-	-	-	-
微細運動	-	-	-	-	-	-	-	-
運動スキル	-	-	-	-	-	-	-	-
適応行動	.54	.41	.69	.67	.63	.69	.70	.87

注：対角線の上が 7～12 歳，下が 13～18 歳の数値

(表 41 のつづき)

	対人関係	遊びと余暇	コーピング	社会性	粗大運動	微細運動	運動スキル	適応行動
受容言語	.33	.27	.39	.40	-	-	-	.46
表出言語	.64	.39	.53	.62	-	-	-	.72
読み書き	.59	.56	.58	.67	-	-	-	.80
コミュニケーション	.68	.54	.64	.73	-	-	-	.86
身辺自立	.53	.47	.54	.60	-	-	-	.73
家事	.59	.54	.66	.71	-	-	-	.84
地域生活	.61	.66	.75	.81	-	-	-	.90
日常生活スキル	.65	.64	.77	.82	-	-	-	.96
対人関係	-	.50	.64	.81	-	-	-	.77
遊びと余暇	.40	-	.58	.74	-	-	-	.70
コーピング	.44	.50	-	.94	-	-	-	.87
社会性	.80	.74	.83	-	-	-	-	.93
粗大運動	-	-	-	-	-	-	-	-
微細運動	-	-	-	-	-	-	-	-

(表 41 のつづき)

運動スキル	-	-	-	-	-	-	-	-
適応行動	.74	.51	.62	.79	-	-	-	-

注：対角線の上が 7～12 歳，下が 13～18 歳の数値

表 42 19～49 歳および 50 歳以上における領域・下位領域間の相関

	受容言語	表出言語	読み書き	コミュニケーション	身辺自立	家事	地域生活	日常生活スキル
受容言語	-	-.04	.08	.11	.01	.13	-.07	.01
表出言語	.47	-	.24	.75	.01	.36	.08	.15
読み書き	-.08	-.04	-	.82	.67	.77	.77	.83
コミュニケーション	.51	.83	.50	-	.46	.74	.56	.64
身辺自立	.56	.52	-.09	.50	-	.52	.80	.89
家事	-.10	-.18	-.07	-.18	-.03	-	.66	.79
地域生活	-.04	-.17	.32	.05	-.05	-.14	-	.95
日常生活スキル	.04	-.13	.17	.04	.19	.61	.66	-
対人関係	.66	.29	.13	.41	.44	-.15	.57	.44
遊びと余暇	.46	.20	.55	.56	-.02	.14	.13	.20
コーピング	.73	.29	-.06	.36	.60	.19	.01	.29
社会性	.79	.33	.28	.57	.43	.05	.35	.41
粗大運動	.02	-.09	.22	.06	.06	-.12	.14	.03
微細運動	-.18	-.09	.36	.05	-.14	-.11	.19	.03
運動スキル	-.01	-.10	.26	.06	.03	-.13	.16	.04
適応行動	.44	.16	.40	.43	.34	.17	.52	.62

注：対角線の上が 19～49 歳，下が 50 歳以上の数値



(表 42 のつづき)

	対人関 係	遊びと余 暇	コーピ ング	社会 性	粗大運 動	微細運 動	運動スキ ル	適応行 動
受容言語	-.06	-.06	-.05	-.06	-	-	-	-.01
表出言語	.10	.15	.29	.22	-	-	-	.25
読み書き	.61	.39	.32	.54	-	-	-	.82
コミュニ ケーション	.46	.36	.39	.49	-	-	-	.69
身辺自立	.67	.60	.20	.55	-	-	-	.82
家事	.58	.50	.57	.66	-	-	-	.83
地域生活	.65	.57	.29	.59	-	-	-	.89
日常生活 スキル	.72	.63	.37	.67	-	-	-	.95
対人関係	-	.49	.68	.93	-	-	-	.85
遊びと余 暇	.26	-	.30	.56	-	-	-	.66
コーピ ング	.59	.36	-	.88	-	-	-	.61
社会性	.83	.69	.81	-	-	-	-	.85
粗大運動	.06	.10	.00	.08	-	-	-	-
微細運動	-.12	.10	-.19	-.08	.47	-	-	-
運動スキ ル	.04	.11	-.03	.06	.99	.60	-	-
適応行動	.65	.53	.52	.74	.62	.34	.62	-

注：対角線の上が 19～49 歳，下が 50 歳以上の数値

## 7. 確認的因子分析

VABS-II は、11 の下位領域がコミュニケーション、日常生活スキル、社会性、運動スキルの 4 つの一次因子によって規定され、さらにそれらが二次因子としての適応行動によって規定されると想定されている。この想定 of 妥当性を検証するため、年齢帯ごとに確認的因子分析を行った結果を図 33～

図 36 および表 43 に示す。なお、分析にあたり、欠損値は完全情報最尤推定により補完した。

いずれの年齢帯でも、各下位領域の一次因子に対する負荷量は十分な値を示している。また、各一次因子の二次因子に対する負荷量も高い値を示している。なお、一部、負荷量が 1 を越えているものもあるが、こ

これは完全情報最尤推定による欠損値の補完が行われたことによるものである。適合度指標を比較すると、7～12歳を除く3つの年齢帯では、4因子モデル(7～12歳および13歳以上の年齢帯では運動スキル領域を評価しないため3因子モデル)が、独立モデル(全ての下位領域が無相関と仮定するモデル)や1因子モデル(全ての下位領域が

1つの因子によって規定されると仮定するモデル)よりも良好な適合を示している(表43)。具体的には、4因子モデル(3因子モデル)が他の2モデルよりもCFIが高く、RMSEAおよびAICが低くなっている。これらの結果から、全体としてはVABS-IIにおいて想定されている4因子モデル(3因子モデル)の妥当性が示された。

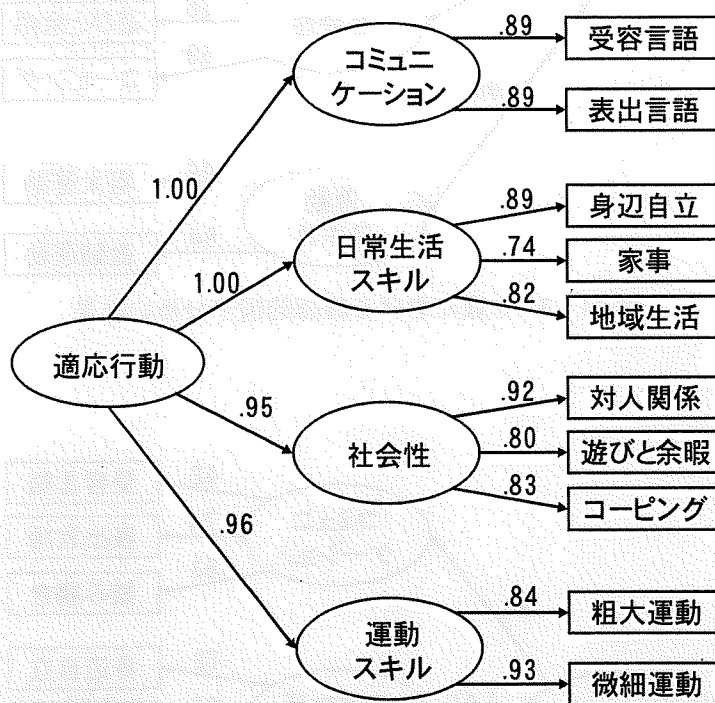


図 33 1～2歳における確認的因子分析の結果

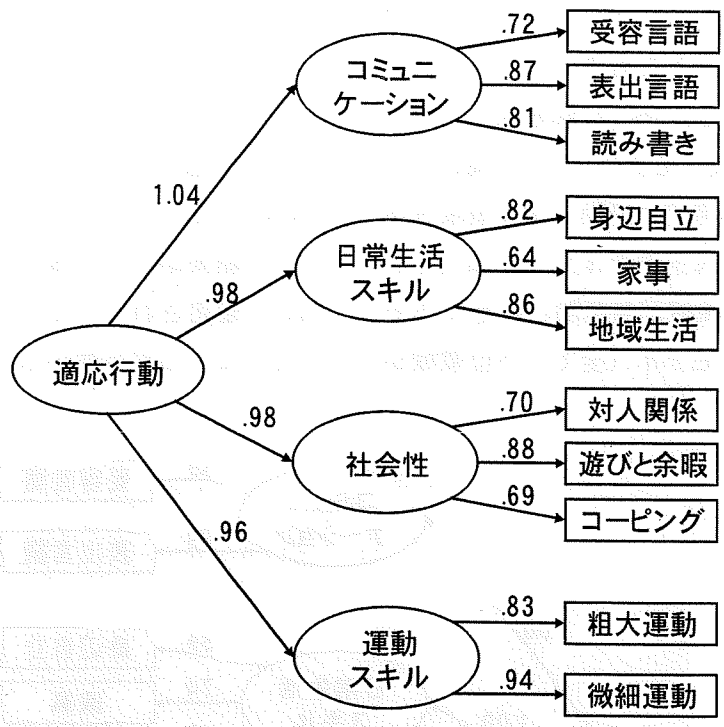


図 34 3～6 歳における確認的因子分析の結果

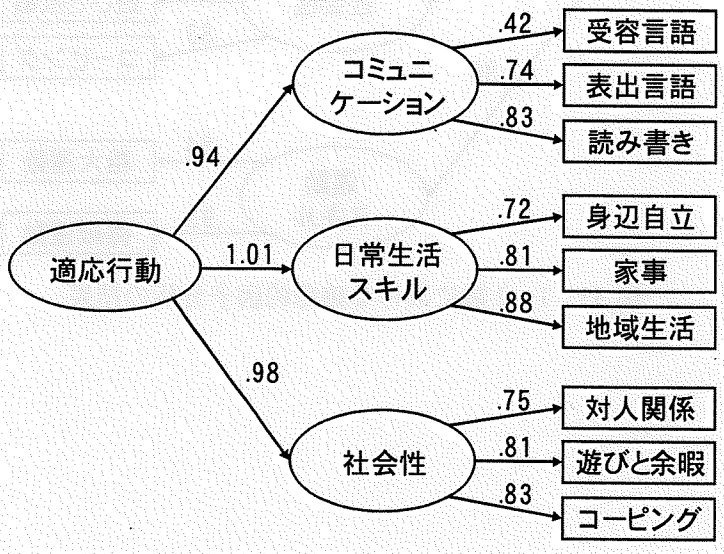


図 35 7～12 歳における確認的因子分析の結果

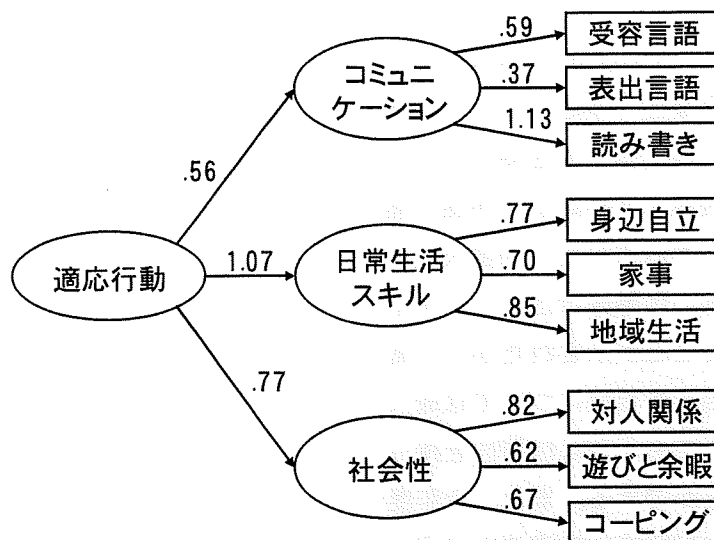


図 36 13 歳以上における確認的因子分析の結果

表 43 確認的因子分析における 3 種のモデルの適合度指標の比較

	$\chi^2$	df	p	CFI	RMSEA	AIC
1-2 歳						
独立モデル	1699.0	45	<.01		0.461	1739.0
1 因子モデル	109.4	35	<.01	0.955	0.111	169.4
4 因子モデル	85.6	31	<.01	0.967	0.101	153.6
3-6 歳						
独立モデル	1008.2	55	<.01		0.401	1052.2
1 因子モデル	114.9	44	<.01	0.925	0.122	180.9
4 因子モデル	104.1	40	<.01	0.932	0.122	178.1
7-12 歳						
独立モデル	632.4	36	<.01		0.375	668.4
1 因子モデル	53.9	27	<.01	0.954	0.092	107.9
3 因子モデル	50.3	24	<.01	0.955	0.096	110.3
13 歳以上						
独立モデル	608.9	36	<.01		0.331	644.9
1 因子モデル	199.0	27	<.01	0.695	0.21	253.0
3 因子モデル	93.3	24	<.01	0.877	0.141	153.3

#### D. まとめ

以上の検討から、VABS-II 日本版は、さまざまな支援の必要性を測定するための項目を備え、十分な内的整合性を持つとともに、適応行動の発達をきめ細かく評価可能な尺度であることが示された。発達尺度であることから、低い年齢帯ほどセンシティブな評価を行えることが示されたが、日常生活スキルや社会性の領域については成人後の対象者についても十分な信頼性を持って評価を行うことができる。また、今年度のデータより、定型発達の基準値を示すことができると考えられる。今後、再検査信頼性、他尺度との相関、臨床群の弁別妥当性などを検討することで、さらに包括的な信頼性・妥当性の検証を行うことが求められる。

#### E. 健康危険情報

なし。

#### F. 引用文献

なし。

## 広汎性発達障害評定尺度第二版（PARS-II）の 妥当性・信頼性の検討

分担研究者 行廣隆次 京都学園大学 准教授

### 研究要旨

本研究では、広汎性発達障害評定尺度第二版(PARS-II)を作成し、妥当性と信頼性について検討した。対象者は、PDD 児者を含む 646 名であった。研究 1 では、PARS の短縮版を作成し、PDD 児者と定型発達児者との比較から妥当性が示され、信頼性についても確認された。また、ROC 分析をもとにカットオフポイントを作成した。研究 2 では、PARS 短縮版の下位尺度の構造について検討し、PDD 児者と定型発達児者との比較から妥当性が示され、信頼性についても確認された。また、ROC 分析をもとに下位尺度ごとのカットオフポイントを作成した。研究 3 では、IQ との関連から、PARS の収束的・弁別的妥当性が示された。

### <研究協力者>

谷 伊織

浜松医科大学子どもの心の発達研究センタ

ー

伊藤大幸

名古屋大学大学院教育学研究科・日本学術  
振興会

### A. 研究目的

自閉症を中心とする広汎性発達障害（以下 PDD）は、その有病率の高さと知的障害を合併しない高機能群が PDD 全体に占める割合が高いことが明らかになってきており、PDD として支援を必要とする人が多く存在する。

PDD の予後改善には早期発見と早期療育

が重要であるが、わが国においては PDD の発見が十分に整っておらず、未治療期間が長いのが実情である。その理由の一つとして、適切かつ簡便な測定道具が存在していなかったことが挙げられる。そこで、我々は幼児期・児童期・思春期成人期の各年齢段階での PDD の特徴を反映させつつ、認知発達水準によらない PDD 特有の困難さを把握する上で有用な評価尺度である「広汎性発達障害日本自閉症協会評定尺度 (PARS)」を作成した。ただし、先行研究においては、PDD と非 PDD 群（定型発達とその他の臨床群）の比較によって妥当性の検討が行われているため、本来の目的により近い定型と非定型の比較をする必要が残った。また、ピーク時の評定（回顧評定）については世代ごとの分析が課題として残

っていた。また、これまでの尺度開発において、実施方法についても改善のための試みを行ってきたため、追試として継続的に確認を続けていくのは尺度開発のプロセスの一つとしても好ましいと考えられる。

そこで、本研究では広汎性発達障害評定尺度第二版 (PARS-II) を作成し、その妥当性・信頼性を検討することを目的とする。研究1では、PDDと定型の比較と、世代ごとのピーク時の評定の分析を行い、PARSのピーク時評定および現在評定の2種類の評定について、フルスケール版の短縮版尺度の信頼性と妥当性をさらに詳細な検討を行うこととする。さらに、思春期成人期のPDDに関しては今後の行政での活用を想定し、受動型のニーズを反映させるため、追加項目の検討を行う。

研究2では、下位尺度を構成し、その妥当性と信頼性の検討を行う。下位尺度については、これまでも理論的に「対人」「コミュニケーション」「こだわり」「常同行動」「過敏性」「困難性」の6つの領域が想定されてきた。各下位概念はそれぞれが独立性のある概念と考えられるが、状態像としては同時に表れる傾向がある（例えば過敏性は困難性を伴う）ため、因子分析の結果としては「対人」と「コミュニケーション」、「こだわり」と「常同行動」、「過敏性」と「困難性」は同一の因子に含まれることを想定し、3～6因子構造を探索的に検討し、解釈可能性や応用可能性などを考慮したうえで、因子構造を定める。また、支援のあり方と対応することが望ましいため、支援マニュアルと対応することが好ましいと考えられる。また、いずれも広汎性発達障害の特徴であるため、それぞれの因子間相関

は全体としては中程度の相関をもつと考えられる。

研究3では、IQとの関連からPARSの構成概念妥当性を検証する。IQとの関連については、以下のような理論的予測が立てられる。まず、社会的相互作用や対人コミュニケーションは一定の知的能力を必要とするため、「社会的コミュニケーション障害」はIQと負の相関を持つと予測される。「過敏性・困難性」は主に情緒的側面の症状に関する下位尺度であるため、IQとの相関は強くないと考えられる。「常同行動」は知的障害のないPDD者の場合、ある程度意識的なコントロールが可能であるためIQと負の相関を示すと予想される。「こだわり」は高機能自閉症にも広く見られる特徴であるため、IQとは相関は弱いと考えられる。

## B. 方法

### 1. 対象

全国28ヵ所(25都道府県)において、分担研究者や研究協力者が活動する地域に在住するPDD群303名、定型発達群343名のデータを分析対象とした。対象者の内訳を表1に示す。PDD群は各地の専門医によって広汎性発達障害の診断を得ている広汎性発達障害児者である。また、定型発達群は各地で研究者が個人的に依頼して参加してもらった。ここでは、PDD以外の臨床群のデータは分析に含めなかった。また、幼児については3歳児以上を分析の対象とする。なお、欠損データもいくつか見られるため、対象者数は分析ごとに異なるが、回答がケースによっては難しいこともあるため、欠損回答が3以下のものはこれを0点とみなして尺度得点を算出した。調査にあ

たつては浜松医科大学の倫理委員会の承認を受け、すべての対象について、保護者から、可能な場合には本人からインフォームド・コンセントを得た。

表1 対象者の内訳

	定型	PDD	合計
幼児期	170	49	219
児童期	71	117	188
思春期成人期	102	137	239
合計	343	303	646

## 2. PARS フルスケール版の構成

PARS フルスケール版は、年齢帯ごとに、幼児期 34 項目、児童期 33 項目、思春期成人期 33 項目を評定する(安達他, 2006; 神尾他, 2006; 辻井他, 2006; PARS 委員会, 2008)。10 項目は 3 年齢帯共通、4 項目は幼児期と児童期共通、19 項目は児童期と思春期・成人期共通である。さらに、すべての年齢帯共通で評定する 3 項目を追加した。

評定の仕方は、心理学または特別支援教育の専門教育を受けた評定者が、情報提供者(たいていは養育者)と面接しながら、項目に示された行動の見られる程度を、0~2 点の 3 段階で評定する。対象が就学前の場合、辻井他(2006)では幼児期項目について現在の状態に対する評定のみを行ったが、本研究では現在の状態の評定と、各項目の状況がこれまででピークであったときの回顧評定を行った。対象が小学校年齢の場合は幼児期項目のピーク時回顧評定と児童期項目の現在評定を行い、中学生以降の場合は幼児期項目のピーク時回顧評定と思春期・成人期項目の現在評定を行なった。

## 3. PARS 短縮版の構成

PARS 短縮版は、幼児期項目、児童期項目、思春期項目ともに 12 項目から構成される(安達他, 2008)。3 年齢帯共通の項目が 1 項目、幼児期と児童期の共通項目が 1 項目、児童期と思春期成人期の共通項目が 9 項目含まれる。PARS 短縮版は、少ない項目で PARS フルスケール版と同等の、PDD のスクリーニング性能を持つことが示されている。本報告では、すべての対象者に PARS フルスケール版が実施されているが、短縮版に含まれる項目のみを用いて得点を算出することで、PARS 短縮版についても再評価を行った。

## 4. 妥当性検討のための尺度

IQ: 過去にウェクスラー式知能検査、ビネー式知能検査、K-ABC 心理・教育アセスメントバッテリー(Kaufman Assessment Battery for Children)のうち、いずれかの知能検査を受けたことのある対象者について、保護者に IQ の回顧報告を求めた。知能検査を受けたことがあるが IQ を正確に報告できないケースについては分析に含めなかった。

## C. 研究結果

### 1. 研究 1

#### (1) PARS 項目の基礎統計量

まず、PARS の各項目の評定の度数分布および診断との順位相関係数を確認したところ、すべての項目において、診断との間に十分な順位相関が認められた。ここでは新項目について、評定値と診断の順位相関を表 2 に示す。



表2 PARSの追加項目の評定値と診断の順位相関

項目	定型			PDD			r
	0	1	2	0	1	2	
仕事の量や時間などの見通しがもてないと不安になりやすい							
幼児期のピーク時評定	85	6	0	8	5	5	.53
児童期のピーク時評定	45	3	1	16	13	36	.67
思春期・成人期のピーク時評定	54	7	0	25	18	34	.60
幼児期の現在評定	85	5	0	8	5	4	.53
児童期の現在評定	46	2	0	18	16	30	.67
思春期・成人期の現在評定	59	2	0	27	23	27	.63
言われるがままに引き受けNOと言えずにストレスをため込むことが多い							
幼児期のピーク時評定	85	4	2	10	1	7	.44
児童期のピーク時評定	42	6	1	23	12	29	.53
思春期・成人期のピーク時評定	51	6	4	31	11	35	.46
幼児期の現在評定	83	5	2	9	4	4	.42
児童期の現在評定	41	8	0	26	23	16	.46
思春期・成人期の現在評定	55	6	0	40	22	14	.43
「適当に」「うまくやっておいて」などのあいまいな指示が理解できない							
幼児期のピーク時評定	77	11	3	2	1	15	.68
児童期のピーク時評定	45	4	0	3	11	50	.88
思春期・成人期のピーク時評定	57	4	0	13	10	54	.78
幼児期の現在評定	80	7	3	2	1	14	.69
児童期の現在評定	47	1	1	9	16	40	.78
思春期・成人期の現在評定	58	3	0	14	18	45	.77

(2) 尺度得点について

世代ごとに尺度得点の平均と標準偏差をPDD群と定型群の群別に求めた。また、全ての尺度得点についてLeveneの検定を行った結果、いずれも等分散性は認められなかったためWelchのt検定を行った。さらに、内部一貫性の指標であるCronbachのα係数を用いてそれぞれの世代を対象とした

PARSのピーク時評定と現在評定の信頼性について検討した。その結果、ピーク時評定、現在評定、短縮版、フルスケールのいずれについてもPDD群の方が有意に高かった。また、それぞれの尺度得点のα係数が.87以上であり、十分な信頼性が示された(表3)。

表3 PARSの平均点と標準偏差, Cronbachの $\alpha$ 係数,  $t$ 検定の結果

		対象	$N$	平均値	標準偏差	$t$	$\alpha$
幼児期							
ピーク時フル	定型		89	2.52	4.38	11.90 **	.95
	PDD		18	33.06	10.71		
ピーク時短縮	定型		89	1.03	2.11	12.49 **	.91
	PDD		18	13.78	4.22		
幼児期フル	定型		90	1.68	2.93	10.66 **	.93
	PDD		17	23.41	8.31		
幼児期短縮	定型		90	0.58	1.32	10.75 **	.87
	PDD		17	9.35	3.32		
児童期							
ピーク時フル	定型		48	2.60	3.15	18.76 **	.96
	PDD		64	36.52	14.00		
ピーク時短縮	定型		48	0.65	0.93	17.34 **	.93
	PDD		65	13.51	5.88		
児童期フル	定型		48	2.04	2.47	16.56 **	.95
	PDD		60	27.60	11.63		
児童期短縮	定型		49	0.65	1.03	16.45 **	.93
	PDD		62	12.48	5.54		
思春期・成人期							
ピーク時フル	定型		59	2.31	2.76	21.51 **	.96
	PDD		75	35.03	12.80		
ピーク時短縮	定型		59	0.49	1.06	21.37 **	.94
	PDD		75	14.35	5.49		
思春期フル	定型		63	0.95	1.67	20.96 **	.95
	PDD		74	25.88	10.07		
思春期短縮	定型		60	0.18	0.50	21.76 **	.92
	PDD		76	11.84	4.64		

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

### (3) カットオフポイントの妥当性の検討

ROC分析 (receiver operating characteristic analysis) を行い, 幼児期ピーク評定および現在評定のそれぞれについて, 対象者の世代ごとに受信者動作特性曲線 (ROC 曲線) を作成し, 各カットオフポイントの妥当性を検討した (表4)。スクリーニングを目的として PARS を用いる場合, フルスケールについてはいずれも 9 点, 短縮版についてはいずれも 5 点を用いることとした。ROC 分析の結果, 幼児期のピーク時評定のフルスケール版の最適なカットオフポイントは

13 点であるが, 9 点の場合も同程度のスクリーニング特性が得られた。また短縮版の最適点は 6 点であるが, 5 点の場合も, 同程度のスクリーニング特性が得られた。児童期のピーク時評定のフルスケール版における最適なカットオフポイントは 11 点であると考えられた。また短縮版の最適点は 3 点と考えられるが, 5 点の場合も, 同程度のスクリーニング特性が得られた。思春期成人期のピーク時評定のフルスケール版における最適なカットオフポイントは 10 点であると考えられるが, 9 点でもほぼ同じ

である。短縮版の最適点は4点と考えられるが、5点の場合も同程度のスクリーニング特性が得られることが示された。

幼児期の現在評定のフルスケール版における最適なカットオフポイントは9点、短縮版の最適点は5点と考えられる。児童期の現在評定のフルスケール版における最適なカットオフポイントは8点であると考えられるが、9点についても同様のスクリー

ング特性が得られた。短縮版の最適点は3点と考えられるが、5点の場合も十分なスクリーニング特性が得られた。思春期成人期の現在評定のフルスケール版における最適なカットオフポイントは9点であった。また、短縮版の最適点は4点と考えられるが、5点の場合も同様のスクリーニング特性が得られた。

表4 各世代のピーク時評定と現在評定のカットオフポイントと関連指標

カットオフポイント	感度	特異性	感度	特異性	感度	特異性
	幼児期ピーク評定 フルスケール		児童期ピーク評定 フルスケール		思春期・成人期ピーク評定 フルスケール	
7	1.00	0.92	0.98	0.90	1.00	0.92
8	1.00	0.93	0.98	0.94	1.00	0.92
9	1.00	0.97	0.98	0.96	1.00	0.92
10	1.00	0.97	0.98	0.96	1.00	0.97
11	1.00	0.97	0.98	0.98	1.00	0.97
12	1.00	0.97	0.98	0.98	1.00	0.97
13	1.00	0.98	0.95	0.98	0.99	0.97
	短縮版		短縮版		短縮版	
2	1.00	0.76	0.96	0.85	1.00	0.91
3	1.00	0.87	0.94	0.98	0.99	0.92
4	1.00	0.93	0.93	0.98	0.99	0.97
5	1.00	0.96	0.90	0.98	0.96	0.97
6	1.00	0.97	0.88	1.00	0.95	0.97
7	0.95	0.98	0.88	1.00	0.91	0.98
	幼児期現在評定 フルスケール		児童期現在評定 フルスケール		思春期・成人期現在評定 フルスケール	
7	1.00	0.96	1.00	0.94	1.00	0.97
8	1.00	0.97	1.00	0.98	1.00	1.00
9	1.00	0.99	1.00	0.98	1.00	1.00
10	1.00	0.99	0.97	0.98	0.97	1.00
11	0.94	0.99	0.97	0.98	0.95	1.00
12	0.94	0.99	0.95	0.98	0.93	1.00
13	0.94	0.99	0.93	0.98	0.92	1.00
	短縮版		短縮版		短縮版	
2	1.00	0.86	1.00	0.88	1.00	0.98
3	1.00	0.93	1.00	0.98	1.00	0.98
4	1.00	0.93	0.94	0.98	1.00	1.00
5	1.00	0.98	0.90	0.98	1.00	1.00
6	0.82	0.98	0.82	0.98	0.96	1.00
7	0.76	0.98	0.79	1.00	0.86	1.00

## 2. 研究 2

### (1) 因子分析

PARS の下位尺度について、探索的な検討を行うため、ピーク時評定 37 項目を対象として因子分析を行い、その因子構造を検討した。

理論上想定される「対人」「コミュニケーション」「こだわり」「常同行動」「困難性」「過敏性」の各概念はそれぞれが独立であると考えられるが、状態像としては同時に表れる傾向があることが知られているため（例えば過敏性は困難性を伴う）、因子分析

を行うにあたり、「対人」と「コミュニケーション」、「こだわり」と「常同行動」、「過敏性」と「困難性」は同一の因子に含まれることを想定した上で、3~6 因子構造を探索的に検討した。スクリープロットおよび解釈可能性を考慮したうえで探索的に検討を行った結果、4 因子構造が妥当であると考えられたため、4 因子を仮定して因子分析（最小二乗法、プロマックス回転）を行った。その結果、見出された解釈可能な 4 因子を表 5 に示す。

表 5 PARS ピーク評定の因子分析結果（最小二乗法、プロマックス回転）

項目	番号	F1	F2	F3	F4
指さしで興味のあるものを伝えない	5	.83	.17	.01	-.20
言葉の遅れがある	6	.82	-.29	.00	.09
会話が続かない	7	.81	-.22	.03	.29
見せたい物を持ってくることがない	4	.79	.16	.08	-.23
視線が合わない	1	.69	-.01	.06	.04
他の子どもにも興味が無い	2	.62	.23	-.02	-.05
友達とごっこ遊びをしない	9	.57	.08	.15	.06
名前を呼んでも振り向かない	3	.53	.02	.20	.06
過去の嫌なことを思い出して、不安定になる	28	-.20	.82	-.06	-.01
課題の量や時間などの見通しがもれないと不安になりやすい	35	.10	.81	-.19	-.05
普段通りの状況や手順が急に変わると、混乱する	26	.06	.67	-.12	.06
急に泣いたり怒ったりする	33	.12	.62	.02	.05
何でも無いものをひどく怖がる	32	-.10	.60	-.06	.18
頭を壁に打ちつける、手を咬むなど、自分が傷つくことをする	34	.01	.41	.26	-.15
生活習慣が乱れ、身辺自立ができなくなる	27	-.17	.40	.25	-.19
特定の音を嫌がる	30	-.03	.37	.19	.21
身体に触られることを嫌がる	24	.14	.37	.20	.10
痛みや熱さなどに鈍感であったり、敏感である	31	-.15	.36	.28	.03
嫌なことを「イヤ」と言えない	36	.18	.34	-.23	.01
「適当に」「うまくやっておいて」などのあいまいな指示が理解できない	37	.25	.25	.04	.18
抱っこされるのを嫌がる	20	.18	.25	.16	.17
ページめくりや紙破りなど、物を同じやり方で繰り返しやる	22	-.03	-.14	.67	.23
食べ物でないものを食べたり呑み込んだりする	19	.00	-.05	.66	-.22
くるくる回るものを見るのが好きである	14	.03	-.05	.66	.13
多動で、手を離すとどこに行くかわからない	18	.05	-.20	.65	-.02
つま先で歩くことがある	17	-.01	-.01	.60	-.18
全身や身体の一部を、同じパターンで動かし続けることがある	23	.03	.07	.54	.06
感覚遊びに没頭する	12	.15	-.05	.51	.06
物を横目で見たり、極度に目に近づけて見たりする	15	.15	-.03	.48	.23
CMなどをそのままの言葉で繰り返し言う	11	-.08	-.06	.00	.81
オウム返しに回答が目立つ	10	.37	-.10	-.08	.68
道路標識やマーク、数字、文字が大好きである	13	-.13	.09	.06	.60
一方通行に自分の言いたいことだけを言う	8	.09	.04	-.06	.51
ビデオの特定場面を繰り返し見る	21	-.11	.15	.14	.49
同じ質問をしつこくする	25	-.28	.19	.00	.38
玩具や瓶などを並べる遊びに没頭する	16	.05	.21	.03	.34
偏食が激しく、食べ物のレパートリーが極端に狭い	29	.03	.18	.11	.24
因子間相関	F1		.25	.45	.27
	F2			.50	.42
	F3				.33